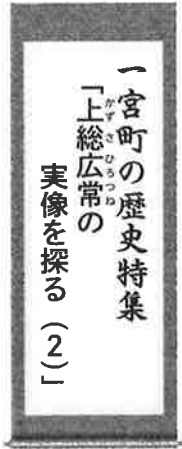


令和3年6月号



広常の実像に迫る前に、まず広常が表舞台に登場するまでの房総半島の歴史を見ていきたいと思います。

時は広常謀殺の寿永2年(1183)から約250年前まで遡ります。

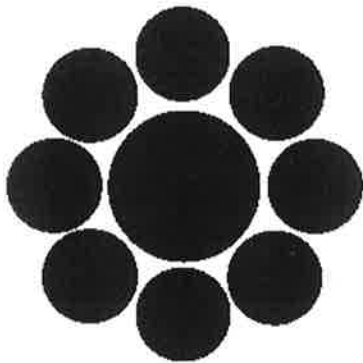
天慶3年(940)、下総国(千葉県北部ほか)・常陸国(茨城県)を中心に起こった平将門の乱。これは関東での平氏一族の抗争から発展し、将門による常陸国府(その国の役所)の襲撃という朝廷への反乱に至った事件ですが、将門の死後、房総半島に登場したのが「両総(房総)平氏」と呼ばれる一族です。祖は将門の孫にあたる平忠常(1031)といわれ、下総国相馬郡(千葉県我孫子市、茨城県守谷市など)を中心に上総、下総、常陸の広範囲に領地を有し、強大な武力を有していました。

長元元年(1028)、忠常は原因は不明(利権をめぐる対立が原因か)ですが、安房国(千葉県南部)の国府を襲撃し、安房守平惟忠を焼き殺すという事件を起します。その後忠常は上総国府をも占領、上総の国人たちは忠常

に味方し、房総半島を巻き込んだ大規模な朝廷への反乱となります(平忠常の乱)。

この乱は鎮圧までに約3年の月日がかかり、最終的に忠常が降伏、病死することによって終結します。しかしながら、3年もの間戦乱の舞台となった房総半島は荒廃し、朝廷軍の収奪もあり、上総国では2万2千町あった作田(田んぼ)は、わずか18町まで減ったといえます(「左経記」)。

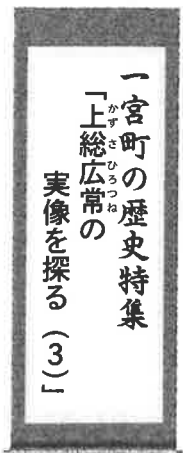
房総半島に大きな爪痕を残した忠常ですが、彼の子ども、常将(1010〜76)らは許され、両総平氏は存続します。そしてこの常将以降、上総氏や千葉氏といった多くの氏族が輩出され、房総半島を中心にその勢力を発展させていくこととなります。



▲九曜紋。上総氏の家紋とされている。

【問合せ】教育課 ☎(42) 1416 (学芸員 江澤一樹)

令和3年7月号



今回は上総氏の成立とその展開を見ていきます。今回の話は少し難しいのですが、お付きあいください。

前回の最後で登場した平常将の孫に常家(???)という人物がいて、この人物が上総氏の祖といわれています。常家は後継ぎがないまま亡くなってしまったため、弟の常晴(???)が上総氏を継ぎます。常晴は下総国相馬郡(相馬御厨)を領有していたため「相馬小五郎」と称し、上総権介となりました。その子孫は上総一國のみならず、下総国の大部分に在地領主として発展しており、常晴が両総平氏の族長的立場を確立していたことがつかがえます。

のちに隆盛を誇る千葉氏はこの常晴の兄にあたる常兼(1045〜1126)を祖とする一族です。

さて、常晴の子にあたるのが常澄(???)ですが、どつやら父とは折り合いが悪かったようで、常晴は兄の常兼の子・常重(1083〜1180)に相馬御厨を譲ったといえます。

【問合せ】教育課 ☎(42) 1416 (学芸員 江澤一樹)



▲かずさのすけ 上総介塔 (神奈川県横浜市金沢区、2018年10月筆者撮影。上総広常の墓と伝えられている。)

結果これを機に、千葉氏と上総氏は相馬御厨をめぐる対立を深め、広常の時代までこの抗争は続きます。このような中で常澄は東国に勢力を伸ばしていた源義朝(1123〜60、頼朝の父)に接近、源氏との関係を強めることとなります。

保延2年(1136)になると、今度は下総守であった藤原親通が相馬御厨の領有を主張、義朝もこの問題に干渉し、千葉氏、藤原氏、源氏(上総氏)の三つ巴の争いに発展します。

このように混乱した状況の中で、登場するのが、常澄の子である広常です。広常もまた一族の争いの中を生き抜いていくこととなります。